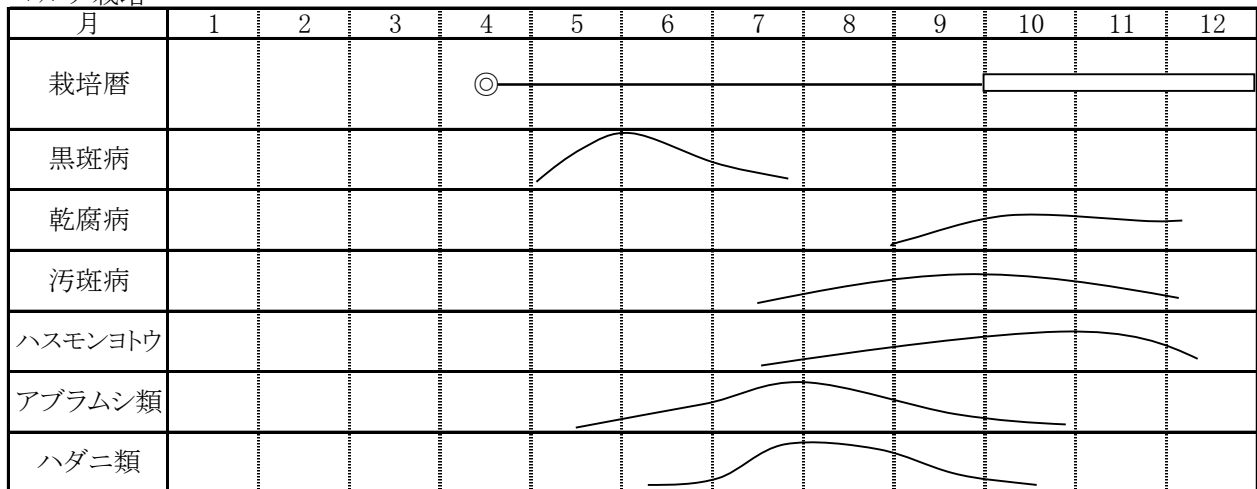


(32) サトイモ

1 主要な作型及び病害虫の発病・加害時期

マルチ栽培



◎定植 収穫

2 主要病害虫別防除方法

農薬による防除については、栽培ステージ、病害虫の発生状況等に応じて、散布、灌注、土壌消毒などを行う。
 なお、農薬による防除の際は、農薬登録内容や使用上の注意等を遵守して実施する。

(農林水産省農薬登録情報提供システム <https://pesticide.maff.go.jp/>)

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
黒斑病 (<i>Ceratocystis</i>)	①種いもは健全なものを使用する。②排水を良好にする。 ③ほぼ2年ではほとんど発病しなくなるので、3年1作を実施する。 【参考事項】 子のう殻、子のう胞子、厚膜胞子、分生胞子を形成する。各形態とも伝染源となるが、厚膜胞子、分生胞子が主な感染源と考えられる。 被害残さを含む土壌と保菌種いもが伝染源である。 生育中に種いもから親いもへと感染する。激発すると、さらに子いも、孫いもに感染する。 病原菌が子いも、孫いもに侵入・感染するのは主に収穫の際で、脱球時と調製作業時の傷口からである。 夏の高温高湿時の収穫は感染を受けやすい。
乾腐病 (<i>Fusarium</i>)	①連作を避け、輪作期間にはできるだけ長期間とる。 ②種いもは無病畑で採種し、子いもや孫いもを使用する。 ③他産地から種いもを導入したときは、一部のいもの下部を切断し断面に病変のないことを確認する。 ④種いもは親株につけたまま貯蔵する。 ⑤発病株を除去し、処分する。 【参考事項】 第一次伝染源は土中の罹病いも残さと保菌種いもである。 長期の連作は場で激発しやすい。 28～30℃の高温下で激増する。 一般に、土壌の乾湿の変化の大きいほ場ほど発病しやすい。
汚斑病 (<i>Cladosporium</i>)	①生育中期以降に肥料切れしないよう肥培管理を適切にする。 ②被害葉は、次作への伝染源となるため取り除く。 ③連作を避け、なるべく長期の輪作を行う。 【参考事項】 円形で指紋のような病斑で、数が増えてひどくなると、秋末には早く枯れ込む。
アブラムシ類	①シルバーフィルムマルチをする。 ②ほ場内や周辺の雑草・作物残さなどが発生源となるので、これらを取り除く。 【参考事項】 主にワタアブラムシが寄生する。本種は、ナス、ピーマンなどのナス科作物、キュウリなどのウリ科作物、イチゴ、キク、ユリ、カーネーションなどに寄生する。 サトイモモザイクウイルス (DsMV) やキュウリモザイクウイルス (CMV) を媒介する。 サトイモへは、5月頃からナスやキュウリ、雑草などで繁殖したものが飛来してくる。 梅雨明けとともに急激に増加し始め、8月に最も発生が多くなり、9月下旬まで発生が続く。
ハスモンヨトウ	①卵塊又は分散前の幼虫寄生葉を除去する。 【参考事項】 ナス科、アブラナ科、ウリ科、マメ科、キク科、サツマイモ、ネギ、シソ、イチゴ、ホウレンソウ、オクラなどの多くの作物を加害する。 暖地性の害虫であるが、暖房のきいた施設内での越冬は可能であり、発生源となると考えられる。 長距離移動性の害虫で、西南暖地から北へ移動しながら発生地を拡大する。 成虫の発生は4月頃からみられ、サトイモで被害が発生するのは7月以降である。 夏が高温の年に発生が多い。

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
ハダニ類	①ほ場内や周辺の雑草や作物残さなどが発生源となるので、これらを取り除く。 【参考事項】 本種は、ナス、スイカ、メロン、イチゴ、ダイズなど多くの作物に寄生する。 成虫は、冬は果樹や樹木類の樹皮間隙などで休眠越冬する。 ハウス内では冬でも繁殖する。 サトイモへは6月下旬頃から寄生してくる。 発生は梅雨明けとともに急激に増加し始め、盛夏期に最も発生が多くなる。 風によっても虫が運ばれて広がっていく。 降雨が少なく高温乾燥の日が続くと多発する。